

『セレクション戦争と文学4 女性たちの戦争』が出版されている。文庫本で660頁を超える大著である。しかも、小さな字が詰まっている。戦争文学において、女性を主人公にした、女性の作家による著作は少ないそうである。確かに、戦争文学と言えば、火野葦平、大岡昇平、野間宏などを思い出す。女性は非戦闘者だから当然かも知れない。しかし、夫や息子を戦場に送り出し、アジア・太平洋戦争の末期には、女性も戦争に巻き込まれ、悲惨な体験をした。だから、戦争について書くのは当然で、全8巻の「4」として『女性たちの戦争』が刊行された。23編が収録され、男性作家の作品もあるが、女性作家たちによる戦争体験を描いた作品が大半で、詩や短歌なども含まれている。戦時に書かれた作品も数編あるが、戦後に、戦時を振り返って書かれた作品が殆どである。

私は1941年に、旧満州大連市で生まれた。もちろん、戦争体験はないが、敗戦後、生活が一変したことを覚えている。また、ロシア兵からの仕打ち、引き揚げ時の様々な苦難、父母の田舎に帰郷してからの食糧難、そして、田舎の人たちの慎ましい生活ぶりを記憶している。本書を読み、戦後の生活環境を、ほろ苦く思い出した。

印象深い作品は多々あるが、三つのシーンについて書きたい。吉野せい氏の『鉛の旅』は、一人の母親が兵舎にいる息子と会うために、汽車に乗って旅する途中の出来事を描いている。通り過ぎる多くの駅では、召集された若者を「万歳」の威勢のいい掛け声で、送り出している。ところが、ある駅で違う光景を見た。「女が突如たち上がると正面から小さい兵士に武者ぶりついてあたりをはばからぬ大声で泣き出した。母か、祖母か、生活の苦勞にやつれ果てた暗い握りつぶしたような顔が同じような息子にしっかり取りすがって全身をふるわせて嗚咽している。(略)大切な明日からの糧をもぎとられたにちがいないこの老女の一途な悲しみを心のままに悲しめるひたむきさに、私の胸は新しい傷口のすがすがしい痛みを感じた。」貧しい女性が我が子か、孫かとの別れに、互いに悲しみを率直に表している。当時としては、許されない光景であろうが、吉野氏は「すがすがしい痛みを感じた」と受け止めている。女性ならでの感性ではないか。

田辺聖子氏は、変わらぬユーモアタッチで、「トキコ」という女学生が戦後の世相の変化に戸惑う姿を『文明開化』で描いている。戦時中は戦時一色であったが、突然、「デモクラシイ」が広まった。理解できずに「デモクルシイ」という人もいた。デモクラシイは民主主義で、人民が主人であるという考え方をし、戦中とは違う人間と社会の変容を見て、「文明開化」を受け止めていく。巡行する天皇の背広を着てソフトを振る姿を見て、「天皇陛下、ばんざあい」の歓呼の声が起こった。その声のかけで、無数の死者の「陛下、ヘイカ、待ってください」、「ヘイカ、置いていかないで下さあいッ!」という声が叫んでいる。「それは目に見えない集団の声かもしれない」と結んでいる。

戦争体験談も戦争文学も、被害者、犠牲者としての苦しみを語り、描かれることが多い。被害を受けたことは確かであるが、加害者であったことは事実であり、阿部牧郎氏は『見よ落下傘』で、加害者の視点から捉えている。中国人捕虜(強制連行労働者)たちは栄養失調で歩けないような状態になっても、働かされる。彼らは苦悩に耐え兼ね、暴動を起こし、逃亡を企てるが、多くの死者を出して、鎮圧される。戦時中、日本が犯した他国人への残酷な虐待を描いている。アジア・太平洋戦争で、日本人は310万人が死んだが、アジアの諸国では、その7倍、2千万人以上が殺害されている。この加害の事実を認識することがアジア諸国への責任であり、平和を築く根拠であると思っている。